

東日本大震災から三年半。被災地の宮城県石巻市雄勝町を訪れた。雄勝半島に位置し、海と山に囲まれ、山間にいくつかの集落がある。ホヤ、カキ、ホタテなどの養殖が盛んで、硯石の産地としても知られる。

仙台市から約八〇キ、車で約二時間。津波で大半が押し流された中心部は、大半が更地となり、総合支所（旧町役場）やスーパーなどがあつたかつての賑わいはない。総合支所のレリーフだけが残っていた。中心部から車を進めると、津波で壊れた漁港の一部は放置され、コンクリート片が散乱していた。時が止まったようだった。

もつと復興が進んでいると思っていた。未だに収束の見通しが立たない東京電力福島第一原発事故の被災地に目を奪われがちだったことに気づいた。復興の遅れの深刻さは、雄勝町も同様だった。

◇ ◇

石巻市は震災で最も被害が大きかった自治体である。被災建物は約五万四〇〇〇棟、死者・不明者は約三七〇〇人。雄勝町は人口約四三〇〇人のうち、約三〇〇〇人が被災し、約二四〇人が死者・不明者となった。町外への避難や移転者が続き、人口はほぼ半減。ただし、住民票に登録している人たちの数で、実際の住人は震災前の約三分の約一二〇〇人にすぎない。石巻市全体の人口減少率は約八％。雄勝に次いで減少率が高いのは牡鹿地区の約三〇％。被災地の中でも、雄勝は「最も復興が遅れている地域」と言われている。

まちが消える

最大の要因は、人口の約四割を占めていた中心部の建物の九割以上が津波で全壊したことだ。市は高台への移転を決めたが、住民には現地で再建を望む声が少なくなかった。合意を得る手続きが拙速だった面もあったうえに、高台の宅地造成が遅れ、町外移転者が止まらない。数十世帯から数世帯にまで減った集落も現れ、孤立する高齢者も出ている。

もともと「陸の孤島」と言われ、過疎に悩み、石巻市などと合併した経緯があるが、震災がさらに急激な過疎を招き、町の存続の危機に陥っている。住民の中にも「雄勝は消滅してしまう」との声が出ているのが現実だ。

合併も復興に影を落とす。雄勝町は二〇〇五年に石巻市など六市町と対等合併したが、復興工事は人口の多い市街地から進められ、人口の少ない遠隔地は後回しにされる傾向にあった。旧雄勝町職員は合併前から半減。住民の意向も本庁に直接届きづらくなった。

合併は、まちづくりの決定権を他者に与えてしまうことでもある。高台移転の住民合意の拙速さもその影響と言える。平時では徐々に姿を現す合併のデメリットが、震災によって一気に表面化した。

◇ ◇

雄勝の苦境は決して特異な例ではない。「平成の大合併」などで、一九九九年三月には三三三二あつた市町村が今年四月現在で七一八市町村に減った。多くが過疎に

よる財政難が理由だ。

「人口減少社会が到来し、国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口によると、国内の人口は一億二八〇六万人（二〇一〇年）から、二〇年後には一億一六六二万人、四八年には一億人を割り、六〇年には八六七四万人まで減る。二〇〇五年と比較して人口が半減する道内の自治体は約三〇市町村に上る。

有識者による「日本創成会議」の分科会（座長・増田寛也元総務相）は、全国の市区町村の約半数が消滅する可能性があるとする報告書を出した。道内では約八割が「消滅可能性都市」とされた。増田氏は大都市に人が集まり、地方の都市が消えていく「極点社会」とし、警鐘を鳴らしている。雄勝町の姿は、過疎に悩む全国の自治体の二〇〇三〇年後かもしれない。

雄勝町に全く光がないわけではない。廃校を利用した自然体験や建築技術などを学ぶ拠点とするプロジェクトや、雄勝硯の工房の新設など、住民の中には再生を目指す動きが少なからずある。

帰り道、総合支所跡地に建てられたブレハブの仮設飲食店に立ち寄り、蒸しホヤを注文した。水揚げしたばかりなのだろう。ホヤ特有ののがさはなく、口いっぱいには浜の味が広がった。こんなに美味しいホヤを食べたことはなかった。雄勝の再生を信じたい。

△洋▽